

身近なまちの風景物語(21)

異質の共有

山や川に加え、田畑を含めて自然豊かな風景と捉えることも多い。そこに茅葺き屋根とまではいなくても、瓦屋根の木造住宅が添えられると、自然に抱かれた生活の営みを感じる。

ではそこにプラスチックやビニールが入ると、風景に違和感があるだろうか。

例えばビニールハウスのある風景はどうだろう。とかくビニールハウスは審美的な対象としては評価されない。ただ各地で重要な農作物が栽培され、特産品を生み出していることも事実である。

ある調査によると、その地域の出身者が他の地域に転出した後、出身地を地域アイデンティティという基準でみると、ビニールハウスの景観は田畑などと同じく高い評価だったという。

十年以上前に遡るが、英国では田園風景の中にあるイチゴを栽培するビニールハウスへの反対運動が起きた。景観に対する意識の高い国民性があり、農業生産よりも景観に価値を見いだす住民たちが声を大にした。

その声を背景に自治体がイチゴ栽培業者にビニールハウスの建築許可のための申請を求めた。それに対し業者側は、許可申請は不要として裁判所に訴えた。業者側の訴えは退けられたが、この問題は顕在化し、国会でも議論されたという。

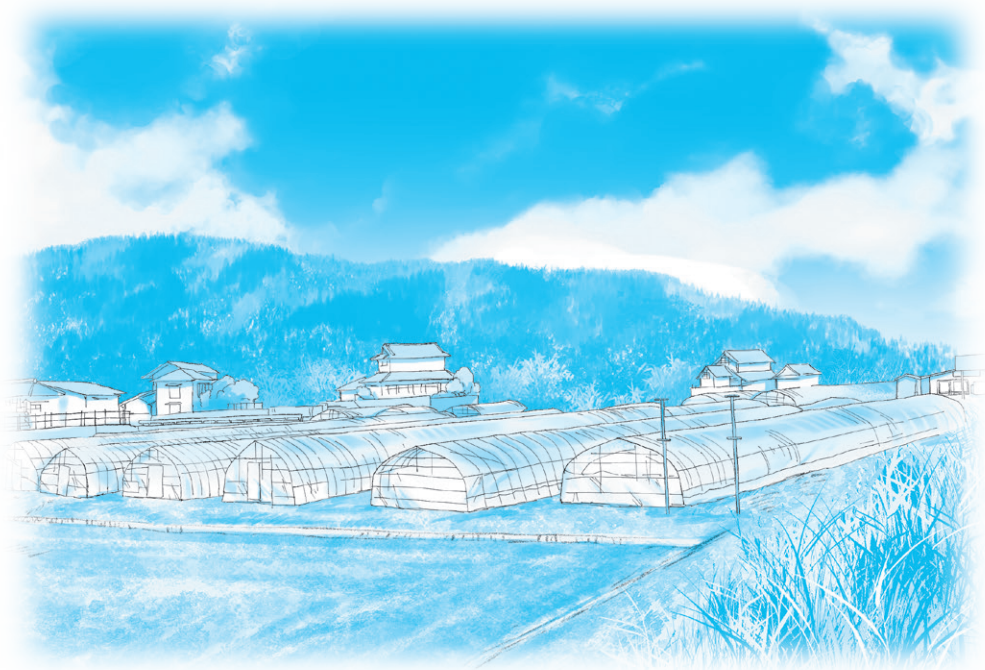
近寄ればビニールハウスの中でどのような作物が栽培されているのを見ることができ、観光農園では中に入ってそれを収穫することもできる。

ハウス栽培は土や水、温度や湿度などきめ細かい管理が欠かせない。手入れの行き届いた生産過程を目の当たりにすることができる。

他所者から見れば異質かもしれない。しかしそうしたビニールハウスのある風景が、その地域に生まれ育った人たちにとっては原風景として共有する価値になっている。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長



挿絵：久田琳佳子（筑波大学芸術専門学群4年）